朝日おかあさん新聞

vol. 144
2016 MAY

〒104-8433
東京都中央区築地 5-3-2 朝日新聞社新館 9 階
朝日学生新聞社
「朝日おかあさん新聞」
企画・制作　朝日学生新聞社
TEL　03-3545-5226
FAX　03-3545-0978
e-mail　mama@asagaku.co.jp

冊子「72時間生き抜くヒント」

タブレット操って避難体験

そなエリア東京

東京臨海広域防災公園（東京都江東区）の「そなエリア東京」には個人でも参加できる防災体験ゾーンがあります。タブレット端末を使って防災クイズを解きながら、首都直下型地震の発生から避難まで一連の流れを体験できる「東京直下72ｈツアー」です。

「再現被災市街地」や「再現避難場所」エリアでは、端末にＡＲ（拡張現実）と連動したＣＧ映像や解説情報が現れて、よりリアルな避難体験ができます。「街の映画館」では、首都直下地震を再現したＣＧ映像も上映しています。

東京臨海広域防災公園のホームページには、72ｈツアーで紹介している72時間を生き抜くヒントをまとめた冊子もアップされています。

ヘルメットや三角コーンを使った水運び、新聞とビニール袋を使った食器づくり、ラップを巻いて防寒など、災害時に役立つさまざまなアイデアが詰まっています。

そなエリア東京は月曜日休館。午前９時30分～午後５時。

かまどベンチ。外した部分はテーブルになります

揚水ポンプは飲料水用ではありません

ソーラー照明灯。この灯りを目印に避難場所を特定できます

マンホール型トイレの組み立て方

マンホールの鍵を開けると

便器の穴が！

テントを張ると個室トイレになります

トイレットペーパーもつけられます

いざ 防災公園へ

11万人の避難が可能
東京都立木場公園

最大震度７を記録した熊本地震から１カ月以上がすぎました。今も１万人以上が避難所生活を続けています。いつ自分の身に降りかかるか分からないのが災害。いざというとき、救済拠点に姿を変える頼もしい公園がみなさんの近所にもあるはずです。

＝３面には「災害食」の記事

マンホール型トイレ／ベンチはかまどに

東京都江東区の都立木場公園は、ビルやマンションが広がる街中の一角に、約２３９㌶の緑地が広がります。ふれあい広場や植物園、ドッグラン、バーベキューエリアがあり、平日でも数千人が訪れてにぎわっています。

都内では53カ所の都立公園が震災時の「避難場所」とされ、そのうち26カ所が「防災公園」「活動拠点」と呼ばれています。

木場公園も防災公園の一つ。災害が起きれば、約11万人の避難場所に早変わりします。

公園を管理する都公園協会木場公園サービスセンター長の吉田健治さんらに園内に隠された「防災設備」を案内してもらいました。

公衆トイレ横の芝生に規則的に並んでいたのがマンホール型のトイレ。ふたを開くと便器が出てきます。ここに専用のテントを設置すると仮設トイレが完成します。園内２カ所に38穴があります。

断水、停電しても、便器の下を通る管が下水道管までつながっているため詰まることもありません。公衆トイレの災害仕様で、地下に貯水便槽があるため、断水時にも使えます。

地域をあげて訓練

園内のベンチも茶色の座る部分を外すと、かまどに早変わりします。煮炊きすることも、暖を取ることもできます。手動で地下の貯水槽から水をくみ上げて生活用水を確保できる揚水ポンプ、ソーラー照明灯もありました。

とはいえ、震災時に使えなくては宝の持ち腐れ。定期的に職員による夜間訓練や近隣の町内会が参加した防災訓練を通して、すばやい組み立て方、使い方を地域をあげて練習しています。

吉田さんは「災害は職員が常駐する日中に必ず起こるわけではない。みなさんの安心のため、いつでも対応できるよう訓練を重ねています」と話しています。

防災公園は、１９９５年の阪神・淡路大震災の教訓から生まれました。公園に避難した市民から、トイレが使えない、煮炊きができない、という不満の声が上がり、ヒントにしたそうです。各地に整備されています。

教えてくれたのは…

木場公園は東京都から委託を受けた都公園協会の職員10人で管理しています。今回の案内役はセンター長の吉田健治さん＝写真右＝と副センター長の武居祥生さんの２人。木場公園一帯は、元々材木業関連の倉庫や貯木場が多くありましたが、貯木場の機能が新木場へ移転したため、防災計画の一環として1992年に開園しました。